

# 虫と子ども

白鳥美智子

ウ虫を乗せてやるんだ。二人は外へ駆け出して行った。

やがて両手一杯に摘んできたクローバーやタンポポの葉をテントウ虫の家に入れながら、「食べるかなあ」と心配そうに覗きこんでいる二人。何を思いついたのか先生、紙ちょうだい。ぼく、いいこと考えたんだ」とKは立ち上ってセロテープとホッチキスを持ってきました。「できた。できた。先生きて。ぼくのスベリ台とMくんのテントウ虫のお家をつなぐんだ。な、Mくん」「うん。Kくん、ここ、テントウ虫の遊園地にしようよ」と顔を見合わせてっこり。それを聞いていたT、「遊園地には観覧車があるんだよ。ぼく、行ったことあるから知ってる。ぼく作る。Kくん、仲間に入れて」「いいよ」と二人。

Tは牛乳パックの箱に紐をつけ、紐を引っぱると上がったり下がったりする、観覧車を作ってきました。それにテントウ

「先生、『テントウ虫のお家です。わざわざないでください』って書いて。ほら、ここにテントウ虫のおふろがあるんだよ。それからね、ここは食べる所」といかにも楽しそうに説明してくれるM。今朝、幼稚園に来る途中一匹のテントウ虫を見つけて来たのです。そして、保育室に入るなり箱と紙を取り出していっしょうけんめい作ったのがテントウ虫の家だったのです。

何度も失敗してようやくでき上がったテ

ントウ虫の家には煙突もついていません。誇らしげなM。新居に入ったテントウ虫をじっと目で追いながらひとりごとを言っています。「テントウ虫って何を食べるのかな」「葉っぱだよ。葉っぱが大好きなんだよ」そばでブロックあそびをしていたKがMのひとりごとに応える。「葉っぱの上にしたから葉っぱかな。そうだ、先生、ぼく葉っぱ取りに行ってくる。Kくん行こう」「うん。先生、この飛行機守ってて。あとでテント

虫を乗せて遊びはじめました。しばらくするうちに近くの子ども達も次々に加わって、いつの間にかテントウ虫の遊園地を覗きこむ大きな輪ができました。やがて昼食の時間になりますと「先生、きょうはぼく達、テントウ虫の所でお弁当を食べるんだ。テントウ虫がひとりできびしいもの」と、テントウ虫をみんなで取り巻いてのにぎやかな食事になりました。

そんな時、Kがそつと近寄ってきて私に耳うちをします。「先生、テントウ虫をお家へ持って帰ろうかな」「困ったわね。だってMくんが見つけてきた大切なテントウ虫でしょう。Mくんに聞いてね。Mくんがいろいろ言ったらいいわよ」。KはすぐにMの所へ行って話し込みました。思いなしか会話の様子が深刻そうでしたが、うまく話がついたのでしょうか、Kはにこにこしながらもどつてきて「先生、ぼく達決めたんだ。今日はMくんがお家へ持って行くんだ

よ。そして明日はぼくなんだ」。二人でいっしょうけんめい知恵をしぼったあげくの最善策でした。

この最善策は、テントウ虫の失踪によって残念ながら実現しませんでした。「チビ」と名づけられたテントウ虫の搜索隊がその後、連日繰り出されているうちに、子ども達の、虫との出会いも多彩なものになってきました。ハチの巣もその一つです。

今では数少くなつた木の電柱に小さなハチの巣を発見した搜索隊は、「裏庭にハチの巣があります。近づかないで下さい」と幼稚園中知らせ回り、早速図鑑をハチの巣の近くに持ち出してハチの種類や巣の形を調べ始めました。そのうちにだれ言うともなく、ハチのお部屋が小さくて窮屈そうだから、もっと大きなお家を作って、お部屋も広くしてやったら、ということになり、画用紙をたくさん丸く筒にして束ねた大きなハチのお家をガムテープで電柱につけた

り、ハチがせっかく作ったお家に入らないのを見ると、お家が白すぎるのだと言つて色をぬつたり、砂糖水を含ませた綿をハチのお部屋の中に差し込んでなんとかハチを誘い込もうとしたり、それはそれはいへんです。

今の子どもは物がなければ遊べない、物で遊ばせられている、とはよく目にし耳にする現代幼児批判ですが、自然環境が虫にとつて十分に生きられるものであり、子どもにも虫と触れ合う機会さえあれば、虫は子どもにとつては昔も今も変わらないすばらしい遊び相手であることをあらためて発見しました。虫との遊びが子どもの心と生活を豊かに、みずみずしく、そして美しく彩られたものにするための大切な経験になることを願っています。

(福島・わかき幼稚園)